資料

第10回神戸看護学会交流集会開催報告：形にしてみようあなたの看護実践～看護研究を論文にするための第一歩として～

Report of the 10th Kobe Nursing Society Networking Meeting: The First Step from Nursing Practice to Nursing Research and Manuscript Submission

丸尾　智実[1,2)]　佐藤　恵美[3)]　城田　純平[1,2)]
Satomi Maruo　Emi Sato　Junpei Shirota
山本　和代[1,4)]　水川　真理子[1,2)]　田中　晴佳[1,2)]　坪井　桂子[1,2)]
Kazuyo Yamamoto　Mariko Mizukawa　Haruka Tanaka　Keiko Tsuboi

キーワード：交流集会，看護研究，看護実践，論文投稿
Key words：Networking Meeting, Nursing Research, Nursing Practice, Manuscript Submission

要　旨

神戸看護学会編集委員会は、第10回神戸看護学会学術集会において、交流集会「形にしてみようあなたの看護実践～看護研究を論文にするための第一歩として～」を企画した。本企画は、臨床の看護職が日々おこなっている優れた看護実践や研究成果を論文として可視化する方法について、実際の投稿経験談や投稿に向けたポイントを紹介し、論文投稿への一助とすることを目的として開催した。

交流集会では、まず「初めての論文投稿～憧れから論文公開まで～」をテーマに、臨床で働きながら論文を投稿・公開するまでの過程について、研究テーマの決定や論文執筆の各段階で直面した課題と、それらを共同研究者とともに乗り越えた経験を紹介した。続いて、「あなたもできる！看護実践や研究成果を論文にするコツ」をテーマに、実践を成果としてまとめるための工夫や、論文の基本構成に沿った執筆方法、投稿のハードルをどのように乗り越えるかについて紹介した。その後、参加者はグループに分かれて、研究や論文投稿に関する悩みや解決策について意見交換をおこなった。

本交流集会は、臨床における看護実践を研究として整理し論文化する意義を共有する機会となり、今後の本学会誌への論文投稿の促進につながることが期待される。

1）神戸看護学会編集委員会
Editorial Committee, Kobe Academy of Nursing Science
2）神戸市看護大学
Kobe City College of Nursing
3）神戸市立医療センター中央市民病院
Kobe City Medical Center General Hospital
4）神戸市立医療センター西市民病院
Kobe City Medical Center West Hospital

１．はじめに

日々の臨床現場において、看護職は対象となる人やその家族に対して質の高いケアを提供し、数多くの優れた看護実践をおこなっている。しかし、臨床経験の中で培われる看護実践の知は言語化されにくい側面をもち（ベナー，2005，pp.3-10）、現場で得られた貴重な知見や実践・研究の成果が「論文」という目に見える形となって広く共有される機会は必ずしも多くない。臨床で働く多くの看護職にとって、自らの実践や研究成果を論文としてまとめることは、時間的制約や研究方法への不安などの理由から心理的・時間的なハードルが高いとされている（舟島，2012，pp.1-8）。

このような背景を踏まえ、神戸看護学会編集委員会では、看護職が臨床で行っている実践や研究の成果を論文として可視化するための支援を目的として、第10回神戸看護学会において交流集会を企画した。

本稿では、本交流集会の開催内容と方法について報告する。

２．交流集会の企画意図および構成

１）企画意図および内容と方法

本交流集会は、看護研究の成果を具体的に論文化するためのプロセスをわかりやすく共有し、自らの実践や研究成果を論文としてまとめることへの心理的・時間的なハードルを下げ、論文投稿の一助となることを目指して企画したものである。

内容としては、実際に臨床現場で働きながら論文投稿という壁を乗り越えた臨床看護師の経験談と、論文執筆の方法や心理的・時間的課題を解決するヒントを提供することとした。また、方法として一方的な講義だけでなく、参加者の研究に関する疑問や悩みを共有したり、相談ができるように参加者間で自由に意見交換ができる時間を設けた。これらの内容により、参加者が「自分にもできるかもしれない」という前向きな一歩を踏み出す契機となることを期待した。なお、開催時間は１時間であった。

２）構成

本交流集会は、２つの講演と意見交換で構成した。具体的には、講演１：初めての論文投稿～憧れから論文公開まで～、講演２：あなたもできる！看護実践や研究成果を論文にするコツ、グループでの意見交換であった。なお、意見交換については、当初個別相談コーナーを設け参加者からの論文投稿に関する具体的な相談に個別で応じる予定であった。しかしながら、当日の参加者のニーズに合わせて変更し、グループに分かれ、編集委員会委員がファシリテートをしながら、参加者に日頃の研究への悩みや課題を自由に話してもらうこととした。意見交換では、参加者同士が共感し合ったり、日頃おこなっている工夫点を共有してもらうために、相談しやすい雰囲気をつくるようにした。

３．講演内容

本企画では、参加者が論文執筆に関する具体的なイメージを持てるよう、二つの異なる視点からの講演を実施した。一つは、実際に論文投稿をした臨床現場の看護師のリアルな葛藤と成功体験の共有であり、もう一つは実践的な論文執筆の方法や論文化の課題を解決するためのヒントの伝授である。以下に、各講演の内容を報告する。

１）講演１：初めての論文投稿～憧れから論文公開まで～

本講演では、論文公開経験のある臨床看護師が、どのような経緯で自らの研究を論文にまとめ、学会誌に公開するに至ったかという経験について報告した。

写真１　講演１の様子

（１）論文執筆の背景と研究テーマの決定

看護師として働く中で、日々の看護実践を心から「楽しい」と感じるとともに、チームで統一したケアを実践したいという強い思いを抱くようになった。そして、キャリアを積み重ねて看護師長になった際には、「看護を楽しいと思える職場作り」を目

指したが、その実現の難しさに直面したことから、大学院への進学を決意した。大学院で研究テーマを選定する過程では、「看護の楽しさを感じる職場」という漠然とした思いから出発したため、テーマを絞り込むことに難航し、長期間かけて模索を続けた。最終的には、経験豊富な看護師が臨床現場で生き生きと働き続けられる環境づくりが重要であると考え、「再雇用看護師」に着目することとした。研究テーマは「再雇用制度で業務負担を軽減して働く急性期病院の看護職者が認識する看護実践の変化」であり、再雇用制度を利用し業務負担の軽減措置を受けている看護職者を対象に、半構造化インタビューを用いた質的記述的研究を実施した。この研究の意義は、看護管理者が再雇用看護職者の強みを最大限に活かした人材活用をおこなうための重要な基礎資料を提供することと考えた。

（２）論文投稿に踏み切った背景と公開までの長い道のり

本研究を大学院での課題研究論文の完成や学会発表だけで終わらせず、学会誌への「論文投稿」に踏み切った背景には、いくつかの大きなきっかけがあった。第一に、周囲に「論文投稿をする雰囲気」があったことである。論文投稿をする人は雲の上の存在と感じていたが、同時に「自分も投稿したい」という強い「憧れの気持ち」を抱き続けていた。

第二に、研究の過程で出会った参加者の「語り」の力である。参加した日本看護管理学会学術集会で、村上靖彦氏（2021）の著書『ケアとは何か 看護・福祉で大事なこと』の一部である「潜在的出会いをキャッチしてストレートに訊くという心がけが出会いの場を開いた」という内容が紹介された。この時に、インタビューを通して得られた再雇用看護師の語りが、村上氏の議論の内容と類似していることから、卓越した看護実践であることに気づいた。また、学会後に「気づきをそのまま相手に伝える実践」について、考察の内容を検討している際に文献を読む中で、井本寛子氏（2020）の論文にある「タイミングよく患者の本心を聴き、関係づくりのきっかけを作る」ということとも再雇用看護師の実践は類似していることが分かり、同実践が卓越していると裏付けできた。こうしたことから「この素晴らしい看護実践を広く伝えたい」と感じ論文執筆をしたいという動機が強まった。

第三の最大の決め手となったのが、指導教員から論文投稿を強く勧められたことである。論文投稿は非常にハードルが高く感じ、こうした支援や後押しがなければ実現は難しかった。

また、論文公開までの道のりは、決して平坦なものではなかった。大学院の課題研究論文が完成した後、日本看護管理学会誌への投稿を目指して、学会の投稿規程に合わせて論文を整理した。１年半後にようやく論文投稿を果たした。しかし、返ってきた査読結果は「大幅修正」であった。そこから、さらに推敲を重ね、課題研究論文が完成してから２年後に論文受理、晴れて論文公開に至るという壮大なプロジェクトとなった。

（３）研究開始から論文公開までの「つまずきポイント」をどのように乗り越えたか

この長いプロセスの中で数多くの「つまずきポイント」に直面した。具体的には、文章が書けない、研究目的が絞れない、研究参加者のリクルートをしても返信がない、インタビューで大事なことを聞いていない、質的データのコーディングができない、サブカテゴリーが作れない、結果の記載方法がわからない、考察が書けない、緒言や要旨が書けない、そして、査読結果の大幅修正への対応などであり、研究および執筆のあらゆる局面で壁にぶつかった。

しかし、これらのつまずきからはたくさんの学びがあった。１つ目は、研究目的の精錬と良い研究デザインの条件についてである。研究目的が見つからないという壁に対しては、良い研究デザインの３条件（意義・新規性・実現可能性）に立ち返ることで突破口を見出した。当初抱いていた「看護の楽しさを感じる職場」というテーマは、「楽しくない」というのは自身の思い込みであると気づき却下した。また、他のテーマもいくつか考えたが、過去に多くの先行研究が存在し、新規性や意義が見出せず却下した。そして、最終的に行き着いた「定年後の看護師の就業継続」は、労働人口の低下や定年後看護師の増加という社会的背景があり、定年後看護師の職務満足度は高いものの再雇用看護師に焦点を当てた研究がほとんどなかったことから、「新規性」と「意義」があるテーマであると確信できた。

２つ目は、文献レビューの意義とまとめ方についてである。文献レビューについては、「キーワードを論理的に説明していくことで、最終的な結論としてそのキーワードで構成される研究目的の重要性が示される」と指導教員から指導を受けた。「なぜ再

雇用制度に着目するのか？」「なぜ業務負担の軽減に着目するのか？」「なぜ急性期病院なのか？」「なぜ看護実践の変化なのか？」といったひとつひとつの問いに丁寧に答えることが文献レビューの役割であり、説明がうまくできない時は、無理にこじつけず、キーワードや目的そのものを見直す勇気が必要であると学んだ。また、先行研究をまとめるプロセスは、著書等の様々な知見を活用しながら、基礎に忠実に進めることの重要性を学ぶことができた。

３つ目は、考察の書き方である。多くの初学者が苦戦する「考察が書けない」という悩みは、質的研究に関する書籍に記載のあった「結果を何度も読み直し、誰よりも深く把握すること」「結果の中で何が一番面白いのか、誰かに一番伝えたいこと（自慢したいこと）は何かを見つけ出し、そこから考察のポイントを見つけること」を大事にした。また、考察のポイントは、必ずしも結果の記述順に現れるものではなく、全体を通して言える俯瞰的な視点から展開することが重要であること、「こういう結果が出た→こういう先行研究がある→だから何がどうだと考えられたか」、という構成で述べるというシンプルな公式について、指導教員から指導を受けたことが非常に役立った。

最後に、論文執筆においては、入り口（タイトルや要旨）からおもしろそうと思ってもらえること、研究経験者の指導を仰ぐこと、計画段階で研究デザインを整え研究自体の限界を理解してから始めること、患者にとってのメリット（研究の意義）を明確に示すこと、そして執筆開始から１年以内に早く投稿することを重要だと感じた。

（４）臨床看護師が研究をおこなう意味と今後の展望

臨床の看護師が自ら研究をおこなう意味は、現場の課題を文献検討することで、その課題が自分の部署だけのローカルな問題なのか、社会全体で未解決の問題なのかを広い視野で捉え直す機会になることである。文献検討の時点で明らかになった知見は、すぐに看護実践に活かすことができる。そして何より、部署で研究に取り組むこと自体が、実際の患者さんへのより良い関わりにつながり、日常的におこなっている看護実践の価値を再認識し、改善点に気づく貴重な機会になる。今後は、現在おこなっている共同研究についても論文投稿を目指したいと考えている。

２）講演２：あなたもできる！看護実践や研究成果を論文にするコツ

本講演では、論文執筆の具体的な手順や多忙な臨床業務のなかでいかにして執筆を進めるかというコツについて紹介した。

写真２　講演２の様子

（１）研究の進め方

まず、研究全体のプロセスを、準備、実施、まとめの三段階で説明した。準備では、臨床での疑問から研究課題を設定して、文献検討をおこない、仮説の設定、研究方法の立案、予備テストをおこなう。実施では、データ収集をおこなう。そして、まとめでは、データの整理、分析、考察を経て、最終的に所属施設内や学会での発表、論文作成をおこなう。このような一連の流れにおいて、準備段階がとても重要になることを強調した。

（２）看護実践を成果に変える５つのコツ

臨床で働く看護職が看護実践を研究や論文投稿へと結びつけるための具体的なコツについて、以下の５つを紹介した。

１つ目は、身近な疑問をテーマにすることである。具体的には、日々の看護実践の中で感じる「なぜだろう？」「どうすればもっと良くなるだろう？」といった身近な疑問を研究テーマに設定することである。例えば、業務の改善や患者の観察といったアウトカムは、日常業務の延長としてデータ収集や分析がおこないやすく、結果として成果を見出しやすい。２つ目は、小さく始めることである。最初から大規模な研究を目指すのではなく、臨床での素朴な疑問から出発し、そこから、研究課題を決定して研究計画書を作成し、倫理審査を通して実施するという小さなステップから着実に進めることが看護実践

の成果を可視化することにつながる。３つ目は、効率化するツールをうまく活用することである。論文執筆の生産性を向上させるために、ICTツールの積極的な活用が不可欠である。例えば、文献管理ソフトを用いて煩雑な参考文献の整理を自動化したり、近年発達が著しいAIツールをアイディアの整理等に活用することである。４つ目は、論文の構成をシンプルに考えることである。論文の構成は、はじめに（緒言）、方法、結果、考察、結論が基本であり、各セクションに何を書くかをあらかじめ振り分けて、簡潔な記述から書き始めることで論文を書くというハードルを低くする。５つ目は、フィードバックを得ることである。論文作成を一人で抱え込まず、同僚や上司、指導者等に原稿案を読んでもらうこと、また、所属施設内での発表や学会発表という場を積極的に活用して、第三者からの客観的な意見や批判的なフィードバックをもらうことは論文の質の向上につながる。

（３）論文のひな型に沿って書き出してみよう

論文の構成をシンプルに考えること、つまり、論文のひな型はある程度決まっていることから、研究計画書の内容や結果を、決められたひな型：緒言、研究目的、研究方法、結果、考察、結論、引用文献、に書きだしてみる。「単に当てはめてみる」という感覚を持つことで、執筆の心理的ハードルを下げることができる。

緒言（はじめに）では、研究の社会的背景や現場での課題といった「わが国の現状」から書き起こす。次に、先行研究で何がすでに明らかにされており、何がまだ明らかにされていないのかを明示する。その上で、本研究の位置付け（本研究が先行研究で明らかにされていることとされていないことのギャップをどのように埋めるのか）について説明する。このように、緒言では、「起承転結」を意識した４段落で構成して記述するのが理想的である。研究目的では、緒言の最後に導き出された研究の目的を、できるだけ簡潔に、原則として１文で明確に記す。

研究方法では、他の研究者が同じ手順で研究を再現できるように「研究の再現性」を意識して書くことが重要である。必要な用語を操作的に定義したり、研究デザイン、研究対象者・施設、研究期間を記載する。データ収集方法については、質問紙・面接・記録分析などの具体的手法や使用した尺度の名前やその評価方法を記載する。分析方法は、量的研究であれば具体的な統計解析手法を、質的研究であればどのような手順で分析をおこなったかを明記する。研究対象者への説明と同意、匿名性の担保、不利益回避などの倫理的配慮について漏れなく記述する必要がある。

結果では、収集したデータから得られた客観的な事実のみを記載する。研究者が考えたこと（解釈）は記載しない。質的研究の場合は、抽出されたカテゴリーやサブカテゴリーを示し、それを裏付ける対象者の典型的な語りを引用するのが望ましい。量的研究の場合は、統計値、表、グラフなどを効果的に用いて視覚的に示し、それらの図表が意味する主要な結果を文章で簡潔に記述する。いずれの場合も、看護実践に関連する主要な結果を中心にまとめることがポイントである。

考察では、本研究の結果を受けて、研究者が考えたことを記述していく。考察の基本構造は、①結果の提示、②先行研究で言われていることの提示、①と②を踏まえて本研究の結果をどのように解釈し、考えたか、という論旨の展開である。結果の意味づけを行い、先行研究と比較することで本研究の独自性や妥当性を論じる。さらに、その結果が実際の看護実践にどのように役立つのか（メリットや応用可能性）を述べ、最後に本研究の限界と、今後の課題や看護実践への示唆を誠実に記載する。

そして、結論では、本研究の目的に対して、最終的に明らかになったことを３～５行程度で簡潔にまとめる。論文の末尾には、研究協力者への謝辞や、利益相反（COI）の有無について明記する。引用文献は、本文中で引用した主要な文献を記載する。いずれも、投稿した学会誌の投稿規程を再度確認して、投稿規程に沿って記載しているか確認する必要がある。

このような論文のひな型に沿って書き出してみる上でのコツは、まずは研究計画書を肉付けしていく感覚で進めること、一行の見出しレベルで章立て（骨組み）を先に作成し全体像を把握すること、必ずしも緒言から順に書く必要はなく、書きやすいところ（方法や結果など）から書き始めることである。さらに、自分の研究テーマに近い優れた先行研究や、読みやすいと感じた論文の書き方（言い回しや論理展開）を模倣することから始めることも、上達への近道である。そして、ひと通り書き終えた後には、本文の内容と合致する抄録（要旨）を作成

し、研究題目が適切か、本文中の用語が統一されているか（例：「看護師」と「看護職者」の混在などがないか）を再考するプロセスも不可欠である。

（４）論文を書く際の最大の障害である「時間不足」への解決策

臨床で働く看護職が論文を執筆する上で、最も高くそびえ立つ壁であり、永遠の課題ともいえるのが「時間不足」である。多重課題に追われる日常業務の中で、いかにして論文の執筆時間を捻出するかが課題となる。

その解決策の１つ目に、マインドセットの転換がある。空いた時間に書こうとするのではなく、研究や論文執筆の時間をスケジュール帳に予定として組み込み、時間を確保する。また、「毎日15分だけでも書いてみる」という小さな目標を設定し、小さな単位で少しずつ進める習慣化やタスクの優先順位付けとスケジューリングが求められる。２つ目は、ICTやAIの積極的な活用である。通勤時間の電車内などの隙間時間を利用して、スマートフォン等からGoogle ScholarやCiNiiなどで関連文献の情報収集を行ったり、AIツールを活用して膨大な関連文献の俯瞰や要点を抽出し、文献レビューの構成案の検討に役立てる。３つ目は、外部サポートや研究チームの力を活用することである。業務の分担や委譲をおこない、チーム全体で研究に協力する体制を築いたり、大学教員等のサポートを利用することで、研究デザインの迷いや執筆の行き詰まりといった心理的障壁を解消できる可能性がある。また、複数人で研究に取り組むことで、研究や論文執筆のノウハウが共有され、成功体験を分かち合うことができる。研究資金の懸念に対しても、例えば、神戸市看護大学が助成している「臨床共同研究（実習施設に勤務する看護職と大学教員が協働して取り組む研究への助成）」のような制度を活用することで、研究計画書作成に関する助成や臨床共同研究費の申請が可能となり、研究資金面でのサポートを得られる。最後に、看護実践の現場は、研究のタネ（Seeds）の宝庫であること、そして、臨床の看護職が日々おこなっている素晴らしい看護実践を言語化して、より多くの人に看護の価値と奥深さを知ってもらうこと、それが、看護の質の向上につながるということを意識して論文化に取り組むことが大切であることを会場の参加者と共有した。

４．グループでの意見交換

２つの講演の後に、グループに分かれて、日頃の研究への悩みや課題、おこなっている工夫点などについて意見交換をした。研究や論文投稿に関して参加者が抱えている具体的な課題が共有された。

例えば、自施設で研究支援の担当をしているものの、日常業務が多忙で十分な支援時間を確保できないという悩みが挙げられた。これに対して、参加者から、大学が実施する研究支援や研修への参加が役に立ったという話があった。また、一人で研究支援を担うのではなく、チームで役割分担を行い、定例会議などで進捗を共有することの重要性についても意見が出されていた。

研究方法については、ケーススタディを計画しているが、介入の効果を示すことができるか不安であるという意見もみられた。この点については、まず文献検討をおこない、先行研究でどのような方法が用いられているかを参考にすることが役に立ったという話がされていた。また、看護実践や研究成果について、必ずしも明確な効果がでなかった場合でも、看護実践のプロセスを丁寧に記述し考察することが、看護実践や研究に役立つことが共有されていた。さらに、研究テーマを選ぶこと自体が難しく、新規性のあるテーマを見つけられるか不安であるという意見に対しては、経験の中で疑問に思ったことを出発点とし、その疑問について文献検討をおこなうことで研究課題を見出していくことができることが共有されていた。

成果の発表については、学会発表までは実施できても論文投稿に結びつかないという課題が挙げられた。これについては、論文投稿が業績として評価される人材を研究に巻き込み、論文投稿のメリットを伝えることで論文投稿への動機づけを高めてもらうことが重要であるとの意見が共有された。

このように、参加者同士がそれぞれの経験をもとに課題や対応策を共有し、活発な意見交換がおこなわれた。参加者が研究や論文投稿においてどのような点に困難を感じているのかを具体的に把握できたことも、本交流集会の成果のひとつであった。

５．おわりに

本交流集会は、看護職が臨床でおこなっている実践や研究の成果を論文として可視化するための支援を目的として実施したが、参加者がおこなっている

実践的な知恵を共有する非常に有意義な機会となった。

講演からは、困難に思える論文執筆の道のりであっても、身近な実践への熱意と、指導者や先行研究、研究参加者との出会い、そして愚直に壁と向き合い続ける姿勢があれば、論文公表という成果にたどり着けるという成果が提供された。また、論文執筆は決して一部の特別な人だけができるものではなく、ひな型への理解、執筆プロセスの細分化、様々な媒体や人材の活用、外部サポートの導入という方法を用いることで、誰にでも実現可能であるという具体的な道筋を示すことができた。

臨床現場に埋もれている無数の「卓越した実践」や「改善のヒント」を言語化し、論文という共有可能な形式にまとめることは、看護の質を向上させるだけでなく、看護職者自身の専門職としてのアイデンティティを確立し、職業的満足感を高めることにも直結する。看護実践を言語化し、論文という形で共有することは、専門職の知識体系の発展に不可欠であり、臨床で得られた経験を省察し理論化する過程そのものが専門職の成長を促すとされている（Benner, 1984；Schön, 1983）。また、看護実践の成果を研究として可視化し共有することは、エビデンスに基づく看護（Evidence-Based Nursing）の発展に寄与する重要な取り組みである（Polit & Beck, 2021）。

神戸看護学会編集委員会は、今後もこのような企画を通じて、現場の看護師が「形にしてみよう」と一歩を踏み出すための支援を継続していく。また、本資料が、日々の看護実践に向き合う皆様にとって、看護研究を論文にするための具体的な「第一歩」を踏み出すための道標となることを切に願っている。

文献

Benner, P.（1984），井部俊子監訳（2005）．ベナー看護論 新訳版―初心者から達人へ．pp3-10．東京：医学書院．（原著名：*From Novice to Expert: Excellence and Power in Clinical Nursing Practice*）

舟島なをみ（2012）．看護研究への招待 第３版．pp1-8．東京：医学書院．

井本寛子（2020）．急性期病院における看護師の臨床的自律性―看護実践の様相および文脈に焦点を当てて―．日本赤十字看護学会誌，20(1)，26-34．

村上靖彦（2021）．ケアとは何か 看護・福祉で大事なこと．p25．東京：中公新書．

Polit, D. F., Beck, C. T.（2021）. *Nursing Research: Generating and Assessing Evidence for Nursing Practice*（11th ed.）. Philadelphia: Wolters Kluwer.

Schön, D. A.（1983）. *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. New York: Basic Books.